
とある科学の能力記憶

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の能力記憶

【Nコード】

N8162Y

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

一方通行が2か月前出会ったのはとある実験によりボロボロにされたレベル4の少女、小鳥遊双葉だった。何故か双葉は義理の妹として部屋に居候（ただ金はちゃんと払ってる）することに。一方通行がお兄ちゃんというとてもない設定ですが、なんか書いてると楽しい。凄く楽しい。読んでると楽しいのかもしれない。そんな小説です。あと作者は義理妹とか妹とか妹設定が好き。とある魔術の禁書目録SS。

第一話 一方通行と妹——なんでこいつはこんな扱いにくいんだ？

現在、巷はドキドキワクワクの寝ても怒られない5月のビックイベント、GWの真っ最中である。

しかしそんなことは、一方通行にとってどうでも良いことだった。今は、それより。

有り得ない、といつも朝に一方通行は恒例行事の様に思う。

のそりとソファの上で体を起こした彼は、台所の方へと目を向けた。

そこでは、可愛らしい少女が朝ごはんを作っていた。

「……有り得ねエ」

「あ、お兄ちゃん起きた？」

一方通行が起きたのに気づくと、少女は嬉しそうにこちらへ駆け寄ってきた。

「朝ごはんもうすぐできるからね。ちょっとまってね」

一方通行の脇にたたんでおいた服を置き、もう一度ぱたと台所で駆け回る少女。

少女の名前は小鳥遊^{たかなしふたは}双葉。中学——正確に言うならば常盤台中学の2年生である。

そして、かなり優秀なレベル4の一人、なのだが——

「有り得ねエ」

一方通行はもう一度呟いてソファに——台所の様子が目に入らな

いように反対側をむいて——もう一度横たわった。

あの様子を見てみると、ただの女の子ではないか。

その様子を目ざとく見つけた双葉は「こらー！お兄ちゃん、早く起きないと健康に悪いよ？おひさまだよ？日がルンルンだよ？」と訳の分からないことを口走る。

「うるせエ」

「お兄ちゃん、朝ごはん天ぷらがいい？ハンバーグがいい？」

「朝から重たすぎだ」

阿保かこいつは、と一方通行は半眼になりながらもそのそと起き上がり、冷蔵庫からコーヒーを出して口に含んだ。

双葉はほえーと間抜けな声をだして「ブラックとはお兄ちゃん凄いなー」と感心している。そんな彼女は砂糖と牛乳をいくらいれても苦い苦いとコーヒーが一切飲めなかったりする。

こんな生活もこれで2ヶ月目に入った、と一方通行はうんざりした。

「オマエ、出ていこうとは思わねエの？」

「全然」

屈託の無い笑みで答えられてしまった。一方通行はわずかに黙り、そして

「殺すぞ」

「んー、いいよ？出来るものなら」

「……」

その挑発に、一方通行は双葉の体に触れようとした。が、出来ない。

「……チッ」

「うん、お兄ちゃんは優しいもんね」

「……飯係が居なくなると思い直したただけだ」

双葉は笑って一方通行にお皿を渡した。その上には先ほどいつていたハンバーグや天ぷらから、なぜか肉饅まで載っていた。

「……オマエ、ちょっとはバランス取りやがれ。なんで洋・中・和の三点セットなんですかア？おかしいんじゃない？」

「えー、なんか冷蔵庫に残ってたのそれしかなかったんだもん。しようがないよ」

「朝からマジ重いなアテメエの作る料理は」

一方通行は文句を言いながらもテーブルできちんと最後まで食べた。その様子に、双葉はニコニコと笑って

「お兄ちゃんはいねえ」

「……殴ンぞ」

双葉は一方通行の暴言には一切動じず、お皿を台所へ持っていて洗ってしまった。

どうもこいつはやりにくい。

一方通行は着替えを済ませるとドアの方へのっそりと歩きだした。

「あれ？お兄ちゃん外出？双葉も行こうかな」

「くんな」

「ん。分かった」

なんでこんなときだけ聞き分けがいいんだよ、と一方通行は突っ

込みたくなつた。

扱いにくい。それに、妙に素直。

それが一方通行がはじき出した、小鳥遊双葉への人柄だった。

「お兄ちゃん、無駄な喧嘩はよしてね」

「……うるせエ」

「そういうときのお兄ちゃんはよく聞くもんね。じゃあ、いつてらっしやい」

「……あア」

ムスツとした顔の一方通行が出ていくと、双葉はエプロンを外し、短パンに半袖というラフな格好になる。それから、することもないので部屋のお掃除をすることにした。それが終わったら少なくともってきた食料の買出しに行こうと頭の中で予定を組み立てる。

小鳥遊双葉。まだ中学生だが今すぐにでもお嫁に行ける家事能力を身に付けていたりする。

一方通行はまだ朝になったばかりの街をぶらぶらと歩いていた。

別に目的があつたわけではないが、しかしあの家にいるよりは外に出たほうが楽だという理由だった。

あの小鳥遊双葉という少女は、2ヶ月ちょっと前の2月後半に出会った。

何故だか一方通行になつてきて、部屋の前まで付いてきた拳句家から締め出すと朝起きたら玄関の前で寝ていた。マンションから放り出しても朝起きれば必ず玄関前にいる。完全な不審者だった。

もしこの場合、一方通行が女で、双葉が男であつたら捕まってい

たのは双葉のほうであろう。が、生憎と一方通行は男だったし、双葉は——しかも可愛らしい——女の子だったので、ご近所さんからの目が痛い痛い。普段はそんなことを気にならない彼だが、連日色んな人に「君、あの子放っておくつもりかい?」「知り合いなんだろう? 助けてやりなよ」と言われ続け、腹が立つたので家にあげさせた。次に、双葉は『金を払うからここにすませてくれ』と頼んできた。断った。次の日には法律上義理妹になっていた。なぜだ。

でもまあ家事をやってくれるし便利ではあるので一応今は追い払うことをしなくなった。毎日朝から作る重い料理はかなり迷惑だが。

「チツ……」

舌打ちをする。それでどうにかなるわけではなかったが、取り敢えず気晴らしだ。

そこらへんを彷徨っている不良にでも奇々をぶつけるか、と思っただが出てきたときに『無駄な喧嘩はしない』と約束してきてしまったので何となくやりづらい。

一方通行はやはりそれにも苛々して目の前に置いてあったバイクを蹴り飛ばした。バイクは一瞬にして鉄塊に成り果てる。

一度双葉を殺してやったほうがいいかもな、と彼が物騒なことを考えていると——

「あー」「オイオイ兄ちゃんなにしてくれちゃってんですかー?」「オレらの大事なバイクが台無しじゃねえか」「金払えよ」「ヒヤッヒヤッヒヤッ」

「取り敢えず殺そうぜ」「いいないいな」「てことで兄ちゃん手合わせ願いますよ」「ヒヤッヒヤッ」

後ろから、低俗な声かけられた。

彼はめんどくさそうに一度舌打ちし——いいチャンスだとばかり

後ろを向いた。

そこには、がらの悪い大学生風の男達が数人。

——喧嘩を売られたンだからしょうがねエよな。

そう勝手な理屈を付け、苛々をぶつける対象を見つけた彼は、獰猛に笑った。

「じゃ、こちらこそヨロシク頼みますよオ——三下」

数分後、その場には地獄絵図が展開されることになる。

兄がそんな憂さ晴らしをしているとは露ほど知らず、双葉は掃除を終え常盤台の制服に着替えた。

外出時には常盤台の制服を着るよんという規則を真面目な彼女はきちんと守っていたりする。

彼女はるるんと上機嫌で鞆を持ち、部屋から出た。

革靴の足音が、カツカツとテンポ良く、踊るように打ち出される。

1時間程で不良たちの組織は壊滅した。

どうやら一方通行が喧嘩を売られた（と思っているのは彼だけであり、傍から見れば普通に彼が喧嘩を売っている）不良たちは結構大きい組織の一員——スキルアウト——だったらしく、仲間の敵討ちか何だか知らないが一方通行に大量の喧嘩をふっかけてきた。

これ幸いと一方通行も喧嘩を買う。おかげで、かなりの苛々がこ

の1時間で解消された。

スキルアウトに感謝するなんて考えもしなかったぜ、と一方通行は小さく奥の方でクツクと笑った。

と――

「へー、君結構可愛いね」「おいまだ昼だぜ」

「お兄さんと一緒に遊ばない?」「何時になるんだよ」

おや、まだ残党が残っていたのか、と路地裏で不良たちがたむろっている所へ一方通行が覗いてみると――

――双葉がいた。

「……チッ」

不良に囲まれた双葉は別に怯えてはないものの、戸惑っている。彼女はレベル4だ。見るところあの不良たちの能力はさして高そうにも見えず、同じレベル4でも、双葉にかなう相手など一人もいないはずだ。

レベル4の中でのトップ。それが小鳥遊双葉なのだから。

で、なぜ彼女が戸惑っているかというと、それは彼女の優しさからくる。

能力を使えば一発なのだが、それを使っているか分からない――というか、使ったことにより怪我をさせるのが申し訳ないらしい。どうせ後で治してやるんだからいいんじゃないかねえか、と一方通行が呆れたほどだ。

ついでに、双葉を取り囲んでいる不良たちは双葉が戸惑っているのを力が弱い、または攻撃系の能力ではないため反撃できない――つまり、ただの女の子と変わらないと思っていらっしゃるしく、見るからに鼻の下を伸ばしていた。

「ねえ、君何年生？」「それ常盤台だよね？」

「中坊にしちゃ中々悪くない顔立ちだな」「俺好み」

そんな気持ちの悪い言葉が風に乗って聞こえ、一方通行は顔をしかめた。

そして、双葉をさつさと連れて帰ろうと彼が足を踏み出そうとした瞬間。

「ご、ごめんなさい」

その瞬間、双葉を取り囲んでいた不良達がボワツと仰け反った。小範囲の爆風でも起こしたのかもしれない。

「なつ、てんめ…っ」「オイ、こいつやるぞ！」

「皆でかかれば大丈夫だ」「何とんでもただの女だしな」

双葉は眉を下げた。それにより、不良たちはさらに興奮する。大方、双葉が自信を無くした、とも思っただのだろう。自分たちならばこの少女を簡単に潰せるとまで思っただのかもしれない。が、違う。

双葉は、やはり相手が怪我をすることを、申し訳なさがっていた。

「あの、怪我したくないなら……どっかへ行った方がいいと思いますけど」

双葉の忠告に「なんだろうゴルァ！」と不良たちが色めき立った。双葉には申し訳ないが当たり前である。

「えと、じゃあ、んー……ここ、ものが多いんですね」

双葉のつぶやきに、不良たちは「はあ？」という顔をした。
そして、双葉は言う。

「なので、物でもぶつけて昏倒させて頂きます」

その瞬間、不良たちの頭上には大量のボールやゴミ箱、何故か車の扉部分などが現れ、そして落ちた。

勿論、双葉は一步たりとも動いていない。

ドガバキヤグキ、と嫌な音がしてそれらが男たちと共に地面へと伏した。

「……んー、路地裏、今度から使うのやめよう」
「当たり前だろ、ンなモン」

双葉が男たちの怪我を治そうとしゃがみこんだのと、一方通行が双葉の方へ歩きだしたのはほぼ同時だった。

双葉はえ？え？と困惑した顔を浮かべた後、

「お兄ちゃん！？なんでここに！？」

「たまたま見てた」

「えー、なら助けてよー」

助けなくても自分でも対処出来るだろうが、と一方通行が吐き捨てる、それとこれとは違うのー！と反論された。意味が分からない。

双葉はきよろきよろと不良たちを見渡し、主だった怪我をしているものの傍に駆け寄って、その怪我に手を触れた。その瞬間、その怪我は消える。

「……」 スキル・メモリー
「能力記憶」 ねエ……」

一方通行は独りごちた。

爆風を巻き起こしたのは『風使い』^{エアロ・シューター}の能力。

男たちの上に物体を表したのは『座標移動』^{アップポイント}の能力。

そして現在怪我を治しているのは『肉体再生』^{オート・リパース}の能力。

双葉が持っている能力は”多才能力”^{マルチスキル}ではない。むしろそれを逆手にとったような能力である。

『スキル・メモリー』。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能力。『能力記憶』。自分が見た能力を自分の能力レベルで操れる能力。』

つまり、言い換えるならば”多才能力を作るための能力”とでも言うべきか。

滝壺とは根本が似ているものの、実際にはかなり遠い。

つまり双葉が持っているのは、”他人の能力をコピーする能力”なのだから。

反則技とも言える能力である。一人で学園都市全員の能力者——勿論レベル5の力は再現できないが——を演じて見せることだって不可能ではないはずだ。

だからこそ、彼女は『レベル5候補生育成プログラム』^{レベルアップ}の一人に抜擢され、一番優秀な成績を収めたのだろうから。

が、今のところそういうのはどうでもいい、と一方通行は思っている。

だから、今は。

「オイ、帰ンぞ」

「あつはーい！」

双葉はぱたぱたと一方通行の方へと駆け寄ってきた。一方通行はそれを待たず、さき先行っていしまうが、双葉はその

距離を空間移動で詰めた。

二人は、仲良く——結構一方的に——家路へと帰ることになった。

第一話 一方通行と妹——なんでこいつはこんな扱いにくいんだ？（後書き）

感想評価、頂けたら嬉しいです！ちょっと滝壺のどこ曖昧かも……ご指摘頂けたら嬉しいです！

第二話 夜中のたわいのない事件——お兄ちゃんって優しいんだなあ！。(前書

2話、ちゃんと全部書きました！

第二話 夜中のたわいのない事件——お兄ちゃんって優しいんだなあ！。

双葉は一方通行の上に毛布をかけようとしたが、その毛布が跳ね返されてしまった。

現在は夜である。GWの最終日。双葉がいつものように——今回はたまたま義理兄が見ていたが——不良を倒した日から2日後。

一方通行は毛布もかけずソファでさっさと寝てしまったので、風邪を引いてはいけないと思った双葉は毛布をかけようとした、ら跳ね返されて今の状態にある。

毛布が飛んできた急いで若干ジンジンと痛む指先を抑えつつ、双葉はいつものように能力を使った。

「右手、エレクトロマスター発電能力、左手、バイロキネシス発火能力」

双葉が呟くと、右手には電気がまとわりつき、左手の掌の上には小さな炎が浮かび上がった。

成功、と双葉は嬉しそうに笑う。

これは毎日の日課。一方通行が寝た後に行う自主トレだ。

一度に複数の能力を発動するのを鍛えるための特訓。

「体表にはオフエンスアーマー室素装甲を展開」

もう一度呟き、また新たな能力を発動させる。

そして左右の（能力が発動したままで）手を自分の体に押し当てた。

「……よし」

かなり危険とも言える行為だったが、双葉には一切の傷がない。当たり前だ、窒素装甲で体を守っているのだから。

以前アイテムという暗部のグループのメンバーの一人と戦った時に得た能力で、双葉は結構重宝していた。発動優先順位がかなり高い能力である。

双葉は能力が”多過ぎる”ため、その中を自分で”決めて”、”発動”するのが苦手だ。なので、いつも”その時の状況に一番対処出来るもの”を条件反射で選ぶようになっていて。が、それとは別に発動優先順位——つまりは突発的な状況で発動する能力のを何個か決めていて、”窒素装甲”はその一つ、ということだ。

双葉は一旦発動させた3つの能力を解き、ふーっと息をはいた。同時に発動するのはかなり疲れるのだ。三人がやる計算を一気に一人でやってしまうようなものである。だからこそ、基本的には順番に発動するのしかやらないのだが。これを克服しないとレベル5になれないだろう、と研究社に言われた。

ま、順番にやるのはレベル4の能力者を順番に対処するみたいなモンだからなー、と双葉も納得した。

水を飲み、一息するともう一度双葉は能力を発動させようか。——と、彼女は思う。

もしかして、いやずっと思つてて、やっぱりやめてたけどお兄ちゃん頭の頭の中を読んでみようか。

いやいや、やめなさい、と彼女の自制心がそれを止める。いやでも気になるー！と好奇心旺盛な部分が反論し「うわあああああつー！」なんか叫んだ。

その瞬間、高速で物が飛んできた。

「うるせエ」

「ごつごめんなさいっ！あ、あとあんまり置時計は投げないほうがいいと思う！」

双葉は投げられてきた置時計をなんなくキャッチし、コトンとテーブルに置いた。一方通行はチツと舌打ちする。

「だいたいなんだア？夜に練習とかイイ子ぶってテメエは褒められたい優等生のつもりかよ」

「そういうわけじゃないけど……なんとなく、無意識っていうか。やらなきゃいけないみたいな？なんでだろうね。でも、お兄ちゃん五月蠅いなら音を反射すればいいんじゃない……」

「チツ、チカチカ光ったり風の向きが急に変わったり——オレだからこそ苛々するんだよ」

確かにそうかもしれない、と双葉は思った。彼は方向ベクトルを操る能力者だ。ずっとベクトルが変わり続けたらうざいのもしれなかった。んー、と双葉は唸り、

「じゃあ外にいつてれんしゅ」テメエには黙って寝るっていう選択肢はねエのかよ」

双葉は眉を下げた。

でも、多分今出ていったら間違いなくこの義理兄は怒るので、おとなしく彼のソファの下——つまり地べた——に横たわった。

一方通行はもう一度だけ舌打ちすると、今度は本当に眠りに落ちてしまった。

一方通行ははた、と気がついた。
そして体を起こす。窓を見ると、まだ今は夜中だった。
そう、人が絶対に出ていけない時間。なのに。
怪訝そうに彼は呟いた。

「……あの糞ガキはどこに行った……？」

あの少女は自分が言ったことを破ったことはないし、聞き分けはいい方だというのに。

双葉の気配はこの家のどこにも見当たらなかった。彼の寝ていたソファの横にも、台所にも。

「……チッ」

一方通行は忌忌しげに舌打ちすると、無造作に靴を履き部屋を飛び出した。

双葉は彼のソファの横で目を覚ました。

ぱふ、と毛布の音をはためかせ、双葉はよいしょと起き上がる。

朝日が眩しい。もう朝だ。

いつもどおり着替え、そして支度をする。彼と自分の朝ごはんを作るために。

そこで、「あれえ……？」双葉は気づいた。

一方通行がソファから居なくなっていた。

「何でだろ……コーヒーでも買いに行つたのかなあ」

首を傾げつつも鳥肉をフライパンの上で裏返した。今日はフレンチっぽいものを作るらしい。やはり朝から重たいものを作る少女だった。

その後もテキパキと朝ごはんを作り終え、エプロンを外した双葉はんー、と唸る。

ご飯が出来上がったというのに、一方通行はまだ帰ってこない。コンビニだったら結構早くに帰れるのにねえ……と双葉が思っている――

――バーン！という音がしてドアが破れた。

「あ、お兄ちゃん！」

双葉は一瞬でその犯人を看破する。それは自身の義理兄だった。その義理兄は少し息を詰まらせ――それからズンズンと双葉の方へ向かってくる。

「どこ行つてたのお兄ちゃん、もうご飯できた――ツツツ！」

「テ、メ、エ、こ、そ、ど、こ、行、つ、て、た、ン、だ、ク、ソ、ガ、キ」

バシコーン！と頭をチョップされた。

うえ！？と双葉は目を白黒させた。

「なっ何かなお兄ちゃん！？す、凄く痛いんだけど！？うつう、なんでそんな怖い顔で連続チョップなのー！？」

「はア！？テメエが夜中にどっか行くからこっちは探しに行つてやつたつてのによオ！何が”何かな”だ！」

「え？それだとお兄ちゃん私を心配したってこと？」

「は、ア！？違エよ！テメエの思考回路はどうなってやがる！つか話逸らすンじゃねエ！」

話を逸らす、と言われても。と双葉はチョップされつつ首をかしげる。

「だって、お兄ちゃんの言ってることが良くわからないんだもん」

「……はア？テメエが夜中に歩いたせいで——」

「だから、私昨日の夜に外に歩いてなんかいないよ？」

「……、」

一方通行は目を開いて驚いた。

チョップが止まった隙にちよつとだけ双葉は一方通行から距離をとりじんじん痛む頭を両手でおさえた。

「……夜中に、出て行ってない、だと？」

「うん」

双葉が嘘をついていないことは分かったらしい一方通行はそのあときちんと朝ごはんを食べ、また寝てしまった。

その寝顔を見ながら双葉は学校へ行く準備をする。

お兄ちゃん優しいところもあるんだなあー、とちよつぴりにやにやしなから。

「じゃ、お兄ちゃん行ってきます」

声は帰ってこなかったが、双葉は何故か満足だった。
常盤台への道は、いつもよりかなり明るく感じられた。

双葉の常盤台での友達はたった一人しかない。

そういつとかなり寂しい人間に見えるが、意外とそうでもなかったりする。

理由は、双葉は一人なのを寂しいと思わないことと、その一人が親友であり、他には誰も必要ないということだ。

「美琴」

「あ、双葉」

学校の門で双葉はその親友——美琴にあった。

御坂美琴。兄と同じレベル5の超能力者。双葉にとってそれは憧れの存在というよりただの同種——または同族好意——なのだが、そういうのを一切関係なく、美琴の人格が双葉は好きだった。

「今日ね、お兄ちゃんがちゃんと朝から起きてくれたんだよ」

「へえ、よかったじゃない」

美琴は双葉に義理の兄がいるのを知っているが、それが誰かは知らない。

双葉も教えないわけではなく聞かれないから答えない。

それに、普通友達の兄が凄い人だなんて想像は巡らせない。

「そういえば、白井さんは？」

「黒子？黒子ならさつき風紀委員の人に連れて行かれたけど……なんか事件があつたみたい」

「ふうん……？」

双葉と美琴は日常会話を交わしながら教室へと入っていく。
と、その途中で――

「何よ、あたしが先にこの子を勧誘したんじゃないっ！」

「え。えと、その……」

「ふふ、とった者勝ちでしょう、普通は」

「とっ！？あ、え……？？」

「なんですって！？」

喧騒が聞こえた。

廊下のだ真ん中でなにやらしい争いをしているらしい。

「……多分、聞く限り派閥争いだよね」

「どいつもこいつも。好きねえ」

美琴と双葉は顔を見合わせて嘆息した。そして、美琴は「はいはい」と間へ割り込む。

「とりあえず、道の邪魔になってるから、やめたほうがいいわよ」

「……あなた、御坂さんじゃありませんの」

「みつ御坂さん！？」

二人の上級生らしき人物は、美琴の姿を捉えると二者二様の反応を示した。

ついでに、その間に挟まれていた下級生っぽい女の子は、双葉の方へ逃げてきた。ほう、と溜息をつく。

「災難だったねー」

双葉が声をかけると、「はう!？」と素っ頓狂な声を上げてビビらせてしまった。何故だ。

その間も、美琴が場を収めている。

彼女はこういうのに長けているから、まかせても大丈夫だろう。それより。

「どうして、派閥なんかに入ろうとしたのかな？」

双葉はにっこりと笑ってその子に話しかけた。その子はビクビクしながら

「強引に勧誘されて……」と答える。

ふうん、と双葉は心の中で思う。読心能力を使ったところ嘘をついているわけでもない。

これは潰し決定かな、と双葉は美琴に^{テレパシー}通心をした。美琴の心を読み取ると”おっけ、分かった”と返ってきた。

「そっか、怖かったね。もう大丈夫だよ」

「えっ？」

その子の疑問には答えず、美琴の方へ歩き出すと、美琴の方はその場は一時収まったらしい。二人の上級生らしき人物はそれぞれの教室へ出ていってしまった。

「美琴、お疲れ」

「あーあ、めんどくさいったら」

双葉は美琴の頭を「美琴はえらいねえ」とわしゃわしゃと撫でまわした。「ちよっやめなさい」と美琴から非難の声があがるが気に

しない。ついでにそれをうらやましそうに眺めるほかの生徒の視線も気にしない。

と、そこでチャームがなった。

「あ、授業だね」

双葉は名残おしそうに美琴の頭から手を放した。

美琴の髪の毛はさらさらなので触っていると気持ちいいのである。

「じゃあ行きましょうか」

美琴の提案に、うん、と双葉は頷き、後を追う。

周りに散っていた野次馬も二人に見習うようにそれぞれの教室へと入っていった。

ついでに、この後、美琴と双葉の手によって1つの派閥が壊滅したことを、ここに記しておこう。

第二話 夜中のたわいのない事件——お兄ちゃんって優しいんだなあ！。（後書

どうでもいいですけどタイトルの「——」のあとはキャラの台詞です。

第3話 スーパーの帰り道、そして異変——お兄ちゃん。（前書き）

一旦これだけです。ちょっとこれから長くなりそう……かも？
最初らへん書き直しました。さすがにキャラ崩壊かなーと（笑

第3話 スーパーの帰り道、そして異変——お兄ちゃん。

双葉はうぬぬ、と唸っていた。

現在スーパーで買い物中なのである。と、今日はお肉の特売だったことを思い出し、買いに来たのだが――

「うーん、こっちのお肉とこっちのお肉じゃ何が違うのかなあ……？」

左右に握られた肉の袋を交互に見て、双葉は首を傾げた。

右は百グラム180円。左は百グラム120円。補助金をかなり貰って割とブルジョワな双葉にとっては驚きの金額である。でもまあこれも社会勉強になるかなーと思って買いに来たのだが、分からない。同じ肉なのになぜ60円も違うのだろうか？

双葉が数分も悩んでいることに気づいたのか、親切な人が声をかけてくれた。

「ああ、右の肉は身の部分が多くて左は油が多いんだ。だからこんなに値段が違うんだとさ。だから買うなら右の方がいいと思うぜ」

「ふわっ！？あ、有難うございます！」

双葉は左を棚に返しぺこぺこ頭を下げた。その人はいいいって、と笑う。

どうやら優しいそんな人だ、と双葉は思い、自己紹介をすることにした。

「あの、私小鳥遊双葉っていいいます。常盤台の生徒なんで常盤台に

用があるときはいつでも言ってください」

「常盤台？常盤台っつーとビリビリの……」その人が言った言葉に双葉は首を傾げた。

「ビリビリ、ですか……？」

こっちの事情、と慌てたように男の人は言い、

「俺は上条当麻っていうんだ」

「当麻さんですか。成程です」

その当麻さんは「……うっー、俺の知り合いにこんな常識人ができるなんて……」となにやら感動していた。

双葉はさらにこの当麻さんの設定を付け加える。なんか変な人だ、と。

そんな設定レットを貼られていることに露ほど気づかず、当麻と名乗る男はその後双葉に”上手な買い物の仕方”を教えてくれた。

普段あまり何も気にせず買い物をしている双葉にとって全てが驚きである。

「当麻さんって凄いですね。私、知らないこといっぱい勉強になりました」

「はは、あんまり金ねえからなー、レベル0って」

「レベル0……ですか」

双葉は驚いたように声を挙げた。

当麻ははは、ともう一度笑う。

「ま、能力は個人の才能だしなー、しょうがねえよ」

「吃驚です……レベル0ってスキルアウト作っていつつ能力者を襲うか暗い目をしているだけかと思っていたので……こんな優しい

人がいるとは驚きです」

「……能力者って本当にスキルアウトに絡まれやすいんだな……」

会計を済ませると——その金額はいつもの5分の1だった——途中まで是一緒だということが分かり一緒に帰ることになった。
と、その時。

「……オイ、なんか帰りが遅いと思ったら……テメエ、彼氏でもいたのかよ」

「あ、お兄ちゃん！」

コンビニに行ってコーヒーを買ってきた帰りだったのだろう。一方通行がコーヒーの入った袋をぶら下げながら双葉の方へ来た。双葉も嬉しそうに駆け寄る。もちろん、当麻を引き連れて。

「あのね！この人双葉のお買い物沢山付き合ってくれたの！なんといつもの」そこで双葉は手の形をパーに、つまり5本突き立てた。

「5分の1の金額で収まったんだよー」

「……ヘエ……そりゃアよかったことで」

「うんっ！」

ついでに、この義理兄妹が和やかに（？）話している横で、当麻は（何この人ー！？白髪赤目って……明らかに堅気じゃないんですけどー！？）

と内心ビクビクしているのに双葉は気づかない。サイコメトラー読心能力は特に発動優先順位が高くないからだ。

「え、えと俺もう帰っていいでせう？」

「ええー、双葉の家でご飯食べていきませんか？」

「いや、その……遠慮させていただきますー！」

当麻はばたばたと両手を振った。もう関わりたくない。妹はともかく兄貴さんの方は。

「じゃ、さいなら！」とだけ言うとき当麻は駆け出した。元から不幸の自分がさらに不幸の根源になりそうなものに突っ込む道理はない。

これが、学園都市の最強と最弱が出会った日だった。

「というわけなの」

「……オマエ、毎日学校でそんなンやってンのかよ……」

今日の学校での出来事を双葉は一方的にまくしたてた。それを聞いて一方通行は呆れかえる。

同時に、双葉のいう”第三位”がかなり常識的な人間であるところに毎度驚かされる。

力を持つものは、大抵の場合ぶっ飛んでるというのに。

「ねーねーお兄ちゃん、あのさーずっと聞きたかったんだけどねー」

双葉は唐突に言い出した。なんだよ、と一方通行は聞き返す。

「どうして双葉はお兄ちゃん的能力を扱えないのかなあ？」

「知ってるわけねエだろ」

「だねー、変だなあ……演算能力の限界を超えてるのかな？だとし
ても”方向転換”のレベル4クラスの力は操れるはずなのにねえ」

「つーかそんなン自分で調べるよ」

「調べても分かんないから聞いてるんだし！ま、いつか」

双葉の能力の最大の利点は”コピーできる”ことなのに。

『スキルメモリ能力記憶』。能力者たちから発せられる微弱な力——A I M 拡散力場——を敏感に感じれる双葉の潜在的力があつたからこそ成り立った能力だ。それがなければ双葉の能力レベルはかなり違っていただろう。

そんな彼女ですら——なぜか、一方通行の能力だけはコピーれない。まあ、確かにどうでもいいことなのではあるが。

「さて、お兄ちゃん今日はだね！な、なんとビックバンサイズのハンバーグなのだよ！」

「本当に作れたら地球破壊してンぞ」

「ふふ……発火能力を使ってだね、適度にじっくり焼き上げるのがコツ！」

「超一部向けのレシピだなアオイ」

そんなあほらしい会話をしているときだった。

プツン、と何かが切れたように双葉は足を止めた。

「？ どオした？」

一方通行も不思議に思つたらしく、双葉を振り返り、

「……………」

息を呑んだ。

一方通行が驚くほど、双葉には感情というものが、一切うつっていない。

無。

空。

空っぽの、何も映らない目で一方通行を捉え――

その目と同じように、平淡な声でいった。

「……お兄ちゃん、私、美琴のところに言ってくるね。もしかしたら、今晚、戻らないかも」

そして、その瞬間姿が消えた。空間移動でも使ったのだろう。

一瞬だけ一方通行は迷い――それから、怒声を押さえ込みながら呟いた。

「チツ、どオなつてやがるあのガキ」

端整な顔立ちが崩れるほど顔をしかめ――

一方通行は、あてもなく走り出した。

第3話 スーパーの帰り道、そして異変——お兄ちゃん。（後書き）

番外个体書きたい番外个体書きたいでも需要ないですよねで書くの諦めてます。ミサカワースト大好きすぎる。双葉に一瞬ミサカワーストっぽい混ぜようと思ったけどやめました。今思えば正しい判断だった気が（ry

主人公設定（前書き）

そろそろ書いところかなーと思ひまして。

主人公設定

<小鳥遊双葉>

常盤台中学の二年生、レベル4の『能力記憶』

『レベル5候補生育成プログラム』^{レベルアップ}の一人。優秀な成績を収めたもののレベル5には到達出来なかった。でもあと一歩のところまではいった。

一方通行の義理妹。

若干天然の傾向があり。しかしやることは時々えげつない。しかも無自覚だからたちが悪かったりする。

真面目な性格なので毎日能力上達の練習をしている。

という訳でちょっと書いてみました。絵にするとイメージ固定しやすいので。

……一つ言いますが作者は一切絵がうまくありません。ド下手です。

絵柄は新約以降をできるだけ真似してみました。

> i 3 5 9 1 5 — 4 5 0 4 <

第4話 今日も、——めんどくせェ。

結論からいって、双葉は一晩探し回っても見つからなかった。

まあ、あてもなく走っていたのだから当然といえば当然なのだが、
で、くたくたになった一方通行が家に帰ると——

——いつもと同じような、料理をする音と、それに伴い発生する
いい匂いが台所から漂ってきた。

「……だからあのガキは……チッ」

どういふことなのだろう、と一方通行は苛立ちをできるだけ抑えて
考える。

双葉の意思が関わっていたとは思えない。あの、空っぽの有様を
みれば、それは明らか。

ならば——

（洗脳系の能力者か？ あのガキに一体なんの理由で……いや、あ
のガキはかなり利用価値のあるレベル4か……つまり、その可能性
も無視できないって訳ですかよオ）

めんどくさくなった、と溜息を吐くと同時に心の奥底では一応心
配する。

それは、彼の心情の変化か。

2ヶ月たって、双葉に出会う前と今では——自分ですら、変わっ

ていると思うから。

ともかく、双葉だ。

彼女と”昨日の行動”には何がある？因果関係は？

そして、それは——”この生活”にどう影響を及ぼす？

そんなことを考えつつ、台所の方へ向かうと、双葉は「あっ」と気づいて笑顔を向けてきた。

やはり、昨日のことはすっかり頭から抜け落ちているのか。

「あ、お兄ちゃん！また朝帰り？感心しないなーもー」

「……オマエにだけは言われたくねエンだよ……」

頭を抱えてうずくまりたい衝動をおさえながら双葉が手渡すご飯を受け取る。

今日は思考を変えてカレーらしい。なんだ、普通だな……と思ったら

「ふふ、スパイスは特性なんだよー」

「……だからその凝り性はどこのだれさんからのなんだよ……」

一口入れてみるとこれが、うんまあ流石なんというか、美味しい。一晩中動き回った体にカレーはキツかったが、いつもどおり完食。

「オレ寝るから起こすンじゃねエぞ」

「へ？はい。おやすみなさい。じゃあ、私学校行ってくるから」
「へいへい」

ソファに寝そべって瞼を閉じると——すぐに、眠りに落ちた。それをみて、双葉は笑う。

昨日とは違ってかわった——優しい、笑みで。

「……もオタ方が……」

のそりと一方通行は起き上がった。
そろそろ双葉が帰ってくる頃か。
もうすっかり暗くなった部屋には、自分以外誰もいない。当たり前か。

双葉と生活するようになってから、随分と人がいることに慣れてしまった。

「……さアて、出かけますかア」

ぼそりと独り言のように呟いて、一方通行は表へと出る。

理由はいたってシンプルだ。双葉が昔いじくりまわされていた研究所に、直接尋ねる。

双葉なら眉をひそめて「それはダメだと思うよ」というようなことを実行する、というわけだ。

その前に、双葉の成り立ちでも調べてみるか。

そっちの方が現実的かもしれない。まず、双葉が弄り回されていた研究所の名前も知らないわけだし。

「めんどくせエ……」

少し、思う。

なぜ自分はこんなことをしているのだろう、と。

あの少女は勝手に来て勝手に居座って勝手に義理妹になった――
どうでもよい、人間なのに。

確かに能力は貴重だ。珍しいとも思う。利用価値がある、とも。
でも、レベル4。格下だ。

そんな相手のことが、なぜ、気になる。

それでもし双葉が未だに弄り回されているとしたら——どうして、助けよう、だなんて。

「くっただらねエな……」

一方通行は鼻で笑った。それは自身のことが、それとも別の何かに対してかは、分からなかったけれど。

その時、ぱたぱたとこちらへ駆け寄る音が聞こえた。

彼がその姿に気づき、反射を切っていなかったら——多分、その姿の主の体は粉々だっただろう。

「お兄ちゃん！ やっほーう」

「おまつ危ねエ！」

双葉が勢い良く一方通行の体に抱きついた。というかほぼタックルだった。一方通行の体が情けないと思いつつもぐらりと揺れる。崩れ落ちることはなかったが、二三步後ずさる。さらにその双葉を追いかけてくる音も聞こえた。

それは、双葉と同じ常盤台の、茶髪の少女。

「ちょっと！ なんなのよ急に走り出したりして！」

「美琴ー、この人が双葉のお兄ちゃんだよー」

双葉は一切人の話を聞かないで一方通行の紹介をした。

美琴、というと。

双葉がよく話す、第3位の超電磁砲^{レールガン}か。

成程コイツがねエ、と御坂美琴の方を不躰にじろじろ見ていると、

「こらー！お兄ちゃん人の友達を睨まなくてもいいじゃん！そりゃ、ちよつとはタツクルしたことは謝るけど……」

「ちよつとかよ」

一方通行は呆れたように言い、双葉の体をひっぱがした。

双葉は頬を膨らませながらも少し嬉しそうだ。

そしていくいと御坂美琴の袖を引っ張る。それにより、御坂美琴は少しお辞儀をした。

「御坂美琴です。双葉のクラスメイトです」

「……あー、まアなんつか、オマエがか……」
「？」

一方通行が呟いたのを聞いて、御坂美琴は首をかしげた。

双葉は嬉しそうに御坂美琴に一方通行を紹介する。

「えとねっ！この人が双葉の義理兄で——えーっと、名前なんだっけ？」

「忘れた」

「なんで忘れるのよもうー。美琴は知ってるかな？一方通行って言うんだ」

「アクセラレータ？」

双葉の言葉を不思議そうに御坂美琴は反復し——ああ！と声をあげた。

「学園都市第1位の！」

「……セーカイ」

へえ、と御坂美琴はじろじろと一方通行を見た。どちらかと言えば好戦的に近い瞳だ。

それを双葉は慌てて止める。

「美琴ー！お兄ちゃんと戦ったら怒るからね。お兄ちゃんも巻き込んで」

「なんでだよ」

「はいはい、ブラコンはもういいから」

「お兄ちゃんがシスコンなんだよ」

「意味繋がってねエからな！？ふざけてンのかテメエ！」

そんなこんなでわいわいがやがや。

そろそろ日が暮れたので帰ろうという話になった。

「じゃあ、まったねー美琴ー」

「どうせ明日会えるけどね」

双葉はくるくると一方通行の横を歩いている。

そのとき、一方通行はふと思った。

こいつなら、いけるかもしれない。

『今日、夜8時、またここで』

そう小声で伝えると、御坂美琴は不審な目でこちらを伺ってきた。当たり前だ。

一方通行はあくまで双葉に聞かれないように言う。

『双葉のことだ』

「……」

そう言つと、御坂美琴はこくりと頷いた。
そして、そのまま別れる。

「お兄ちゃん、今日は何がいい？」

「軽いモン」

「分かった、じゃあ天ぷらね」

「……嫌がらせだろオがソレ」

双葉はにひひ、とちよつとだけ意地悪い笑みを浮かべた。一体誰の真似をしているのやら。

二人の影は夕暮れに混じり、濃く、そして長く伸びていく。

第5話 協力要請——あの子が。

「で？話って何かしら」

「……敬語やめたのかよ。どオでもいいけどな」

その日の夜の8時、夕方会った場所で二人はまた落ち合った。

御坂美琴の方は門限破りをしてきたらしい。一方通行は双葉には”遠くのコンビニに行く”と言っておいた。あの勘のいい少女が気がつかなければいいのだが。

御坂美琴はここじゃなんだから、と近くの鉄橋まで一方通行を連れ前方で歩いている。無言なのもなんだし、ということで一方通行は会話をふりかけてみることにした。

「オマエ、レベル5の中でもかなり有名な方だが狙われねエのか？」

「んー、まあ、ぼちぼちってところかしら。ま、レベル5の実力をもつてしてみれば、全然とるに足らない奴らばかりだしね。鼻につくから殆どのやつは再起不能にしてるけど」

「ふーん。やっぱ狙われるモンなんだなア」

「ま、それは力あるものの宿命、ってところでしょ」

ビリ、と御坂美琴は軽く紫電を散らした。それを見ただけで、やはりこの前の夜に双葉が使っていた紫電よりも高レベルであると分かる。

「アイツ、学校の方はどうなんだ？」

「双葉？そうね、私と居る以外は基本一人かしら。あ、間違ってもいじめとかじゃないからね。そこんとちゃんと理解しておきなさい。別に一人であることになんの感情も抱かないタイプだから」

「だろオナ」

「ついでに総合成績は3位」

「……レベル5である2人の次、ってどこか」
「正解」

御坂美琴は笑って答えた。

そんなこんなで鉄橋である。前方をあるいていた御坂美琴もくるとこちらを振り返って立ち止まった。

「で？何かしら、用件は」

「オマエ、ハッキング得意だろ」

ピク、と御坂美琴の眉が動いた。

「それが、何かしら？第一、どうして得意だと思うの？」

「エレクトロマスター発電能力者、それに第3位とあればいろいろしがらみもあってバシクとか調べる必要が出てくんだろ」

「……ま、いいわ。アンタにバレても通報されなさそうだし。それで？双葉のこと、なのよね」

「アイツの過去を調べてやって欲しい」

今度は目が険しくなる。

一方通行はひとまず溜息をはいて、最近の双葉の言動を教えた。特に、昨日の、あの空っぽの有様を。

それを聞いて、御坂美琴は少なからず動揺したようだ。

「……あの子が」

「ああ。俺の勘では洗脳能力者か。だが、研究者に何かされたっつー可能性も拭いきれねエ。だから、調べてくれないか？」

「いいわよ、分かった。私も洗脳能力者の方の線が多いと思うから、

そつちを重点的にしらべるけど。それから、あの子が過去に通っていた研究所よね？」

「ああ。助かる」

いいわよそんなの、と御坂美琴は笑った。どうやらよほど友達思いらしい。

こういう友達なら、双葉には悪くない、と一方通行は本気で思う。御坂美琴と携帯のアドレスを交換し、『とりあえず2日待つて。それまでにすべて洗いざらい調べとくから』という結構人権と黙秘権とプライバシーを侵害している気がする言葉をかけられ、解散。

時計を見るともう10時になっていた。

早く帰らないと、あの義理妹は怒るだろう。

そう考えると、何故か彼の口元は緩んでいた。

そのころ。

お兄ちゃんが最近家にいない。

双葉は頬を膨らませて足をばたつかせた。

そして無意識のうちに風力使いの力を使って者を浮かせていることには気づかない。どうやら余程退屈しているようだ。

と、彼女の思考はブレイカーが落ちたように、ストン、と消えた。

双葉はゆらりと立ち上がる。

それはまるで、夢遊病患者の様な、不安定な足取りで。

御坂美琴は愕然としていた。

双葉の過去を知ろうと思ったことは一度もなかった。いや、”能力”が面白そうなので調べてみたことはある。しかしその時は異常なプロテクトにより詳細はしれなかった。

が、彼女が本気を出せば、どんなプロテクトだろうが関係ない。能力とそれ以外を駆使して追求するのみ。

そして。だからこそ。

御坂美琴は見てしまった。

「……全部、偽りだっただなんて」

そうして彼女は全てを知る。

双葉の過去と、それから今――

彼女が特別な人、一方通行への気持ちを。

第5話 協力要請——あの子が。（後書き）

今回はちよつと短い、かも…？ですね
気分が乗れば書き加えます

第6話 小鳥遊双葉 —— こんなの、ひどすぎる。

御坂美琴は一方通行と別れたあと、すぐに自分のPDAを開き、バンクを漁った。

まずは洗脳能力者の一覧。
マリオネット

双葉ほどの能力者（彼女も精神系能力を持っていたはずだから、ある程度の耐性は付いているという意味で）を完璧に操る程の能力者なのだとしたら、それはレベル4だろう。

レベル4の洗脳能力者の名前を一応頭に叩き込んでおき、次は双葉のページだ。

『小鳥遊双葉』。その学生のページの欄に書いてある記述は、誰が見ても明らかに少なかった。

『常盤台中学2年生』『レベル4』『能力記憶』。

細かい所は全てはぐらかされていたし、内容だって薄い。こんなの、誰でもわかるような情報だ。それは例えば、噂話だけでも分かるレベルではない。

御坂美琴はもっと深くを調べようと自身の能力を発動させた。ビリ、と小さく紫電が散る。異常に強いプロテクトを突破し、

「……よし、出たわね」

ビビビ、と画面をスクロールさせる。

『小鳥遊双葉は小学2年生の夏頃この能力を発動。即座に研究者に目を付けられ、多才能力専門やAIM系能力専門の研究所を主に研究所を転々とした。この能力の使用は無意識だが心情的な部分が強

く、過去の経緯からか”自分の敵だと認めたもの”にのみ能力を發動させ、力をコピーする。とある実験の過程で一度力を暴走したことがあり、当時レベル2だったものの総合的にはレベル4の力を使い研究所を破壊し、急遽呼ばれた岸綿操^{がんわたみさお}によって沈静させられた。それをきっかけとして彼女を実験にさらに協力的にさせるよう岸綿を使い操ることになり、現在もそれは変わらない。”レベル5候補生能力向上プログラム”で最優秀成績を収めたものの、あと一歩のところまで成長は停滞。彼女の心情的な部分かららしく、”これ以上力を持つ意味があるのか”というものだと言心能力者を呼び判明した。岸綿は”大切な物を作ることによって力を欲するのではないか”と結論をだし、まずその対象は学園都市最強の一方通行にし、”もしも彼が小鳥遊双葉を敵と認め、能力を行使した場合”と、”彼が小鳥遊双葉を敵と認めなかった場合”の二つの可能性からそれぞれをプランを組み立てた。前者の場合、小鳥遊双葉は一方通行の能力をコピーすることができ、後者の場合は岸綿の能力で彼女に一方通行へ好意を抱かせ、強制的に同居人にし、大切な人に仕立てるといったものである。現在後者が実現し、再び小鳥遊双葉は能力の向上にきちんと向き合うようになった。常盤台に通い、常盤台の超電磁――”

その後もつらつらと文章が書かれていたが、御坂美琴はスクロールを止めた。

そして、呟く。

彼女の目に止まったのは、

「……岸綿の能力で……。双葉の、一方通行への好意は、能力によって出来たものだったの……？」

全て、偽りだったというわけか。

あの毎日話す嬉しそうな顔も、何もかも、全て。

有り得ない、と思う。

だって、こんなの余りにも——ひどすぎる。

「とりあえず、連絡を……」

携帯電話を取り出す手が震えた。ポケットから取り出そうとして、地面に落ちる。

そこで、考えた。

こんな、こんな酷いことを、本人に——一方通行に、言うべきなのか？、と。

言わなくてもいいのではないか。

言わないほうが、幸せなのではないか。

御坂美琴はうずくまり、携帯電話に手を伸ばしたまま硬直した時、

ピリリリリ、と電話がなった。

ただ、少女は願う。

できうることなら、あの優しい義理兄が自分を探しに来ませんように。

ただ、少女は思う。

誰も。もう誰も死にませんように。——否、殺しませんように。

そして、少女は最後にすぐることも、助けてと呟くこともなく。

ただ、

——逃げて、と。

それだけを、彼に祈った。

一方通行は御坂美琴に電話した。双葉が、また居なくなっただからだ。

それも、部屋のドアを開けたまま、である。
やはり、洗脳能力者の線が強そうだ。少し、不安になってくる。

『オイ、オマエ少しでいい、何か分かったか？』

先ほどから、御坂美琴は何も反応しない。もしかして、まだ調べている途中なのかもしれない。

御坂美琴はやはり答えず、一方通行がもう一度呼びかけようとする——

『聞きたい？』

その、御坂美琴の声が、明らかに夕方や先ほどと違うのが感じられ、一方通行は眉をひそめた。
一方通行がああ、と答えると

『……分かったわ。そっちに、情報を送るから』

ぶちり、と電話が切られ、そして直後に大量の情報が送られてくる。

双葉が小学二年生で能力を発動したこと、やはり洗脳能力者によって操られていたこと。
そして。

「……俺への、好意？」

全てが、偽りであったことを。
彼は、見た。

第6話 小鳥遊双葉。——こんなの、ひどすぎる。(後書き)

うーん、ちょっと展開が早すぎたかも…？すみません、時間がない
もので。

あー、やっと書きたいことがかけそうです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8162y/>

とある科学の能力記憶

2011年12月3日13時49分発行